
ステッパー！

冬木 亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステッパ―！

【Nコード】

N2968B

【作者名】

冬木 亀

【あらすじ】

どんな思想も、独裁者の前では喰われる。国の秩序は失われつつあり、それでも保とうとするものと崩そうとするものの間で争いは絶えない。人と人が武器を手にもち争えば、死人だつてでる。その始末をまかされるのが、お師匠さまの率いる「浮き雲屋」のしごとだ。そこに集まるやつは、まともなのが一人もいやしない。

第一話・死に身がふたつ。(前書き)

すこし荒っぽい表現が出てきます。ご了承ください

第一話：死に身がふたつ。

「かーっ。死臭がぶんぶんするぜ」
馬の手綱をとる手に、力が失せた。

ふと、目の前にする高樓を見上げれば、これでもか、と言わんばかりの暗雲が立ち込めている。

これから私は、この伏魔殿に入るのか・・・。
ひとつ、身震いをした。誰も見ていないことに感謝しつつ、同じく恐怖に震える馬の背をたたいて励ました。

「おい、彦丸ヒコマル！ぼさっ、としてねえで馬をこっちに持って来い！！」
兄弟子の言葉で、ようやく手に力が入った。

「はい、ただいま」
言っておきたいが、言えない。そこには越えられず、打ち破れない、先輩と後輩の間に聳え立つ厄介な壁がある。

私の名は、ヒ子だ。
兄弟子のいう彦丸とは、私の後ろを遅れて歩く、頼りない男のことだ。あの兄弟子め、まだ私の名前を覚えていないのか。

私は彼をちらりと振り向いた。目が合うと、あいつは私に向かって微笑んだ。
変なやつ。

彦丸は、ちょうど一週間前に師匠の「始末屋」に入った。裏の名は始末屋だが、公に名乗るときは「浮き雲屋」としている。兄弟子いわく、それでも名乗らないと、気味悪がられて仕事が舞い込んでこないのだという。ふん。名前をどんなに偽ったって、私たちのやっていることは外道ではないか。そうは思っても、やっぱり言えない。

「おい、刀剣は持ってるのか？」
「いえ」

「馬鹿なやつがあるかよ」

兄弟子は今にも倒れそうな瘦身をふらふらさせ、背に担いでいた数口の刀のうち、適当なやつを引っこ抜いた。

「残党が影に潜んでることもあるんだ。死にたくなかったらそれくらい帯刀しとけ」

そういつて兄弟子が私の手に放ったのは、正真正銘のなまくらだった。

「とかけ 蜥蜴」

兄弟子の名を呼ぶ声がした。振り向けば、彦丸のそばでもう一人の兄弟子が立っていた。彼女と私は始末屋ゆいつの女だった。黒髪を追い風に急ぎ立てられ、彼女は蒼白な顔をぐいっと腕でぬぐった。

「どうした。ウイ子。おまえ、さきに着いてたんじゃなかったのか？」

蜥蜴という兄弟子は、めつたに驚かないが、彼女ウイ子がどこかしら恐怖に顔をゆがめているのが心底気になるらしい。声を荒げたのがその証拠だ。

「ああ、先に着いてたさ」

ウイ子は、しきりと顔をぬぐうが、顔に表れた恐怖はどうしたってぬぐえていない。そのことを彼女は全く知らないのだろうか。

「他のやつはどうした」

蜥蜴は高樓を背にしてウイ子に尋ねた。しかし、彼女は返事をしなげばかりか、蜥蜴を見れずにいる。いいや、蜥蜴じゃない。その背にそびえたつ高樓を恐れて見れずにいるのだ。

きな臭い。

「ほかのやつは、どうした、っていつてるんだ」

蜥蜴が叫んだ。渋る必要もないのだが、ウイ子はようやく明かした。

「なに？」

真相をきいた兄弟子は、もう一人の兄弟子の肩をゆさぶった。

「なぜ、見捨てて逃げてきたんだ」

「だって、死にたくない」

「・・・ええい、ちくしょう」

蜥蜴はガラガラと背にする刀剣を荒地に落とした。彦丸はいつのまにか私の傍に立って、怒りをあらわにする兄弟子を見下ろしていた。「ウイ子。お前は師匠を呼んで来い。そのくらい、できるだろうがよ」

ウイ子は何もいわず、私の手から馬の手綱を奪うと、その背に跨った。あつ、という暇もあたえず、彼女は明るい空が広がる南へと馬を走らせていく。

「ヒ子」

なんだ。覚えていてくれたのか。

「はい」

「それに、彦丸」

「・・・」

「お前ら、身の程をわきまえてるから俺の下についてるんだよな？この人はかならず、出陣する前、下のもの達にこういう。これが決まり文句だった。私はそれを耳がいかれるほど何度も聞いた。」

そして・・・

「師匠はお前らの能力を買ったんじゃない。何を買ったかしてるよな？お前らの、抵抗しない命を買ったんだ」

そして、この人からこう言われた者たちは、必ず朝日を拝めずに消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2968b/>

ステッパー！

2011年1月25日03時19分発行